

■石母田正 日本史学者。「中世的世界の形成」で衝撃的に登場し、古代史研究に画期、文学史にも問題提起。

いしもだしょう

明治天皇没・1912＝ 札幌で、次男に生まれ、

生後まもなく、宮城県牡鹿郡石巻町(石巻市)に転居し、明治人間の典型だった専制的な父のもとで、漢学・英語の勉学に専念させられながら育つ。

原敬首相暗殺1921＝ 9歳：

小学校を5年で、

中学校は4年で修了するという秀才ぶりで、

朝日新聞社勤務などののち、

共産党事件・1928＝16歳：仙台の第二高等学校文科甲類に入学、三木清・羽仁五郎らの影響を受けてマルクス主義に接近し、{社会科学研究会}のメンバーとして活動したため、

海軍軍縮条約1930＝18歳：無期停学処分となり、父から厳しく詰問・折檻されるも、その父が学校に怒鳴り込んで解除され、

満州事変・・・1931＝19歳：卒業して、東京帝国大学文学部西洋哲学科に入学、日本労働組合全国協議会の機関紙{通信労働者}の発行・配布に関係して2度検挙されるうち、歴史学に関心が傾き、

帝人疑獄事件1934＝22歳：家永三郎らのいた国史学科に転科、

辻善之助の指導を受けて、

日中戦争始・1937＝25歳：卒業。富山房編集部に就職し、「古事記」「万葉集」など日本古典の編集に従事し、出入りしていた史学者の薫陶を受ける一方、在野の歴史学研究会に在籍し、

健保+総動員 1938＝26歳：論文を{歴史学研究}に連載して研究者のスタートを切り、この頃から、厳しい灯火管制のもとで、同志とともに日本古代・中世史を、史的唯物論の立場から共同研究し、古代の戸籍の史料批判・分析にもとづく古代家族論・奴隷制論にかかわる論文をつぎつぎに発表するが、

第二次大戦始1939＝27歳：

日米開戦・・・1941＝29歳：

・・・1942＝30歳：この年以降、沈黙、

創価学会検挙1943＝31歳：富山房を退社し、日本出版会総務部に勤め、弾圧で検挙者の相次いだ歴史学研究会が

年金+総武装 1944＝32歳：*活動停止になると、休暇をとってほぼ1ヵ月で「中世的世界の形成」を書き上げ、辞職して朝日新聞東京本社出版局に入社し、「日本古典全集」の編集に従事しながら、出版をめざすも、

敗戦・・・1945＝33歳：空襲によって印刷所が焼失、

新憲法公布・1946＝34歳：*敗戦後になって刊行されるや大反響、人文・社会科学の諸分野に大きな影響を与え、歴史学をめざす青少年のバイブル的存在となるとともに、朝日新聞も退職して、堰を切ったように著作・発表し始める。

新憲法施行・1947＝35歳：法政大学に招かれて専任講師となり、

極東裁判決・1948＝36歳：教授に昇格。ゆたかな哲学的、文学的資質にもめぐまれ、「古事記」を題材とした「古代貴族の英雄時代-古事記の一考察」(石母田・太田秀通共著)、戦後いち早く、民主主義科学者協会・日本文化人会議の創設に参加し、歴史学研究会の編集長をつとめ、{アカハタ}{中央公論}{世界}等諸紙誌にも健筆を振うなど、科学運動にも積極的にとりくんだ。特に1950年代初頭の国民的歴史運動は、歴史学をアカデミズムの拘束から解放し、民衆が足もとから身近に歴史を掘りおこしてゆくことを通じて歴史意識を高めてゆく道を示したもので、その間に書いた諸論稿を集成して、

独立回復・・・1951＝39歳：

メーデー事件・1952＝40歳：「歴史と民族の発見」、

TV放送始・・・1953＝41歳：「続歴史と民族の発見」を刊行、多くの若者の精神を鼓舞し、

国連加盟・・・1956＝44歳：「古代末期政治史序説」、

なべ底不況・1957＝45歳：「平家物語」など文化史・思想史にわたる労作も発表するが、

安保闘争・・・1960＝48歳：*安保闘争の結果、革新勢力の力が衰退するに伴い、論文の数が激減し内容も精彩を欠いて行く。

TV宇宙中継始1963＝51歳：大学でも法学部長・大学院委員会議長に就任するなど、公務も多忙となる。

東京リビック 1964＝52歳：

いざなぎ景気1966＝54歳：

美濃部都知事1967＝55歳：付属図書館長、

震ヶ関ビル・1968＝56歳：大学常務理事になるなど、自らの世界観とはウラハラの体制側に属すことになり、

大阪万博・・・1970＝58歳：この前後、激しい大学紛争に見舞われたこともあって、

ドルショック・・・1971＝59歳：「日本の古代国家」を刊行。日本の古代国家の成立を、東アジア国際関係の中で、広い視野からとらえるとともに、律令国家の専制支配の基盤的階級関係を首長制としてとらえるなど、新鮮な視野と理論によって論じ、古代国家研究の新しい枠組を提示したが、

石油ショック1973＝61歳：難病にかかり、研究も著作もできぬようになり、

クランブル事件1975＝63歳：以後長い闘病生活を強いられて、

・・・1981＝69歳：法政大学を退職。

中曽根内閣・1982＝70歳：

・・・1984＝72歳：

バブル始・・・1986＝74歳：没した。

没後、「石母田正著作集」全16巻(岩波書店)が刊行された。